

神さまはすぐそばに

「就寝時間は午前五時頃になります。主人は、〝そろそろ家内が帰って来る時間です〟と言つて起きて待つているからです。私が若い頃職場の準夜勤を終えて帰宅するのが午前二時半頃になり、その頃の主人は玄関の電気をつけて私の帰りを待つていました。その頃のことを今言つていようです。始めの頃は涙も出ましたが、もうなれっこです。お菓子やお茶を飲んだりして主人の心が静まるのを待ちやつと寝ます。起きるのが八〜九時……」

福岡県ほけ家族の会（片岡ツル子代表）会報、高橋桂子さんの手記の書き出しである。夫の異常行動が織りなす老夫婦の毎日にはめまぐるしい。八時すぎ起床、勤めに行きます。出勤簿に印を押さねばなりません。などといらだちで一日が始まる。

夕方はきまつて、〝お家に帰ります。〝汽車の時間を調べて下さい。〝名刺とパスが見つかりません。〝。パジャマのポケットを何度も探す。「すっかり泣き顔です。とても神経を使うらしく疲れるのも早い。その機を逃さず牛乳、ヨーグルトをあげます。毎日

ですから私も疲れます。頭の中はただ真つ白です。：一番困ることは、家内が居なくて」と家内の悪口を聞かねばならないことです」

ああ、ひとの何倍分も生きておられる。自分をしっかり見つけ続ける主体的人間だからである。大分県ほけ家族会代表大平都嘉子さんは「私たちは盲導犬を見習って、忠実にただひたすらに守りの側に回ります」と。お二人の言葉は何と気高く響き合っていることか。

(一九九四年二月二十一日)